

悩みによって自由意志が妨げられているならば、それは罪にはならず、赦しがあるかどうかは問題にならない。

したがって、自死する人は必ずしも自殺という罪を犯しているとは限らない。史上自殺したすべての中で実際にその罪を犯した人が一人もいないことさえあり得る。カトリックでは、原則としては自殺者の葬儀をしないという慣習は確かに存在した。私はカトリックの神父であるが、1960年代に養成を受けていた期間において、自殺者の葬儀をすべきかどうかということが話題になった時、自殺した人が自由な意思が妨げられるほど追いつめられていたと考える理由があれば、葬儀を挙げるべきだと神学校で言われたことがある。私は挙手して尋ねた。「自殺したこと自体はそう考える理由になりませんか」と。その時、「そういう考え方もいい」という返事を頂いた。本書の後書きには、「私は自殺者の葬儀はしません」と発言した神父の例が挙げられているが、それはまれな態度ではないだろうか。自殺者の葬儀がカトリック教会で断られた例を少なくとも私は知らない。過去において、そういうことは確かにあった。しかし、自殺に対する理解が変わっただけでなく、罪も救いも関係性に関連付けられて理解されるようになったこともあり、教会の自己意識は上から管理する権威から支え合う共同体へと変動したということもあって、葬儀自体は遺族のためのものだという認識も強まってきたことで、現在では対応が大いに変わっているのである。

橘宗吾著

『学術書の編集者』

(慶應義塾大学出版会、2016年)

大隅 直人

寺山修司の『幸福論』の冒頭の章「マッチ箱の中のロビンソン・クルーソー」は、すぐれた読書論である。寺山は、幸福というものについて書物の中で論じることの限界から話をはじめている。そこで繰り出される、この詩人らしい問いかけのひとつとして、たたみ一畳位の大きさで、厚い鉄の表紙のついた「偉大な書物」についての夢想在

登場する。寺山は、こう書く。「要は、その書物をめくるに要する体力の問題にかかわっている。その鉄のページを、全力でひらいて「意味の世界」と対決するときの疲れ方——労働にも似たころよさのようなものが、なぜか欲しくなってくるのである」(寺山修司『幸福論』角川文庫、1973年、13-14頁)。

本書の著者も、序章「学術書とは何か」において、たとえば電子ジャーナルの普及にともなって、学術成果を「情報」として捉える態度が浸透している昨今の状況について、「ひとことで言えば、そこに欠けているのは、「作品」性であり、人間の知と身体を賭した信頼性の提供です」と言い切る(20-21頁)。第1章「編集とは何か」では、インターネットにおける検索機能の突出にたいして、「読むことが、特に体系性や世界性を読むことが、衰弱しつつあるように見えます」と指摘し、検索の便利さは否定しようもないが、「しかしそれは、読むことに取って代わることはできない」とし、「むしろ、不完全な情報の中で生きるしかない人間が、創造的に生きようとするれば、こうした、読むことによる自己変容・自己変革は最も重要なものの一つです。そしてこの自己変革こそ、イノベーションといわれるものの根本ではないかと思えます」と述べている(30頁)。第2章「企画とは何か」においては、ケーススタディとして取り上げられている『漢文脈の近代』の執筆者である齋藤希史氏が第一草稿は必ず手書きで書くというエピソードを紹介し、そのことについて「これはコンピューターが苦手ということではまったくなく、いわば滑った文章、饒舌なだけの文章にならないようにするためだということでした。これにはとても感じるどころがありまして、言いたいこともあります。これ以上はやめておきます」と記している(81頁)。ちなみに、この第2章には、重要な用件を執筆者がメールで伝えてきたことについて、「そんな大事なことをメールで言うとは！と、だいふ腹を立てた」と書いているくだりもある(79頁)。

以上、序章から第2章にかけて、はなはだ偏った抜き書きで恐縮だが、およそ学術書にかかわる人間であれば、誰もがきちんと考えたい、考えね

ばと思うような事柄が、ひとつひとつわかりやすく論じられており、著者の言う「人間の「文」の道」(52頁)というものをめぐる、一貫した、まっすぐな態度に、畏敬の念を覚えざるを得ない。電子化全般やインターネット、(本書では触れられていないが)AIやVRといった事柄と、人間とのかかわりについても、さまざまな予想や考え方があると思うが、まずはこのようにはっきりした態度を決めることが、創造的で生産的であると私も思う。本書を読んで、そのことについて、つよく再認識させられた。

第3章「審査とは何か」と第4章「助成とは何か」も、学術書が成立するために必要な条件について、論点をていねいに整理するのみならず、そこには、きわめて現実的な提言が含まれており、とてもためになった。

第5章「地方とは何か」は、「知の普遍性」というものについての、非常にすぐれた考察となっており、「いずれにしましても、「めんどくさい」道を通してしか——そうした道を含むものとしてしか——表現されない知やスタイルがあることを認識すべきなのです」という締めくくりの言葉も、ストンと腑に落ちて、胸がすく思いがした(150頁)。

付録のインタビュー「学問のおもしろさを読者へ」は、対話によって引き出されるなにかが、本体の不足を楽しく補ってくれていて、さらには本全体を振り返るのにおおいに役立った。

著者のような、ほんとうにすぐれた編集者が、ここまで自分の経験や知識や思想を公にしてくれたということは、ありがたく、とても貴重なことだと思う。

著者は、自らについて「話すのが苦手な著者に会うのが怖い編集者」などと書いている(53頁)。けれども、饒舌というのとはまったく異なるが、著者のつよい思いのようなものは、本書の端々、行間から、溢れこぼれているように、私には感じられた。

その上で、人が生きて行くために、自分の人生を生きるために、それぞれに育てて行かねばならない「志」のようなものについて考えることは、あくまでも読者自身に委ねる。そういった厳しさ

においても、あくまでも一貫したものを感じた。そのことにも、共感せざるを得ない。

ひとつ補足するならば、『京都大学文学部の百年』という冊子に、著者が寄稿した文章が収録されている。タイトルは「書けなかった卒論——「考える輩」を尊ぶ」というもので、インターネット上でPDFが公開されているので、読むことができる。このエッセイを読むと、著者のナイーブなところ、志のありかのようなものを、感じるができる。本書の帯には、「読むこと そして挑発=媒介」という言葉が印刷されているが、この「挑発」の中心にあるなにかについて、さらにあれこれと想像できるのではないかと思う。本書に興味を持たれた方には、あわせて読まれることをおすすめしたい。